

# 4

## 児童生徒の実態を把握するための基本

- 児童生徒の発達の段階や実態を踏まえた指導を行うことは、特別支援教育の基本。
- 子どもの発達段階(発達年齢)を正確に知るには心理検査が有効。実態や特性の把握は、何をどのように指導するかということで変わってくる。

### 1 実態把握の基本

～ できるだけ早く 多面的に行う ～

#### ■子どもの実態に応じるためのポイント

- 障害の状態や発達段階をとらえる
- 障害については基本的な障害の理解とその子における状態をとらえる
- 発達段階は個人差と個人内差の二つからとらえる
- 本人の願いや特性をとらえる
- 本人の興味・関心、好み、苦手なことやくせをとらえる

#### ■実態把握の基本的な考え方

- 一人一人の良さや、できること、わかっていることなど肯定的な把握を基盤に行う
- 実態の内容は、活用しやすいよう観点別・項目別に整理する
- 医学的所見、心理検査結果等の情報を活用する
- 複数の目で理解する

児童生徒の発達の段階(発達年齢)や実態(障害の状態やできること、特性)を踏まえた指導を行うことは、特別支援教育ではごく基本的なことです。

適切な実態把握なしに、適切な指導目標や手だてを立案することは難しいです。特にも新入生を受けもつときや、異動してきたばかりの時は、個別の指導計画や年間指導計画の作成に苦慮することになります。

実態把握は、できるだけ早いうちにできていることが肝心です。また、できるだけ多面的に把握することが必要です。行動観察だけの実態把握や、書類上だけの把握では、その子どもの本当の力をわかったということにはならないのです。

### 2 実態把握の結果は指導に生かされなければならない

#### ■指導に生かされる実態把握とは

- <必要な条件>
- ・学校としての育てたい子ども像やその学部における役割が明確であること
  - ・自校の子ども達の傾向や地域のニーズを十分に把握していること
  - ・実態把握の内容と指導目標、手だてに関連性をもたせること
- <把握すべき内容>
- ・障害の特性や発達の状態、健康状態
  - ・前年度の学習や生活上の目標、到達点、有効な手だてなど
  - ・家庭環境、生活環境、他機関との連携の様子
  - ・本人、保護者の願い(生活面、学習面、進路面の現在の願いと将来的な願い)
  - ・心理検査、発達検査等の記録 など
- \*小学部では生活面についての細かな把握が、高等部では進路面についての細かな把握が必要になるなど、生活年齢や健康状態(医療的ケア)によって、把握すべき内容は異なります。

できるだけ、たくさんの情報があった方が良いことは当然ですが、どのように指導に生かしていくのかというビジョンをもっていなければ、ただ眺めるだけで終わってしまいます。

各学校で作成している実態把握表(フェイスシート)の項目は、一つ一つが課題の設定や手だてを考える上でどのような役割をもっているのでしょうか。指導に生かされる予定のない項目は、個人情報保護の観点からも削っていく必要があります。

また、本人や保護者のニーズや願いを聞くときには、ニーズや願いにどのように応えるのかということも予め用意しておく必要があります。聞くだけ、聞いて、何もしてもらえなければ、本人、保護者の信頼を失うことにもつながりかねません。

しかし、だれのための教育か、だれのための指導計画かを考えたとき、本人、保護者のニーズを把握しないでいて、実態を把握したとは言えないはずで



### 3 心理検査や発達検査等の結果をどう活用するか

#### ■心理検査を実施するための基本

- 保護者の了解を得ること
- 目的にあった検査を選択すること
- 検査者は検査の手順を十分に習得すること
- 結果を日常の生活の行動と結び付け、解釈できる力を付けること
- 検査結果を個別の指導計画に生かすこと
- 児童生徒にとって利益や恩恵をもたらすものであること
- 一度の結果だけで、全てを判断しないこと

#### ■検査をすることのメリット

- 個別の指導計画等の目標の設定に役立つ
- 本人の得意なところや苦手なところを分析することができる（個人内差）
- 得意なところを生かした課題や手だてを考えることができる
- 本人や家族の障害への理解を図ることができる
- 発達検査は、その子どものその時の発達の状態をみるものであるため、定期的の実施することで、その子どもに対する教育の効果をはっきりと感じたり、他者に示したりすることができる（例：PEP-RやK-ABC等）

#### （１）心理検査を実施することの大切さ

心理検査の結果を過信することは厳に慎むべきことですが、心理検査そのものを否定するというのも、非科学的で、客観的な判断とは言えません。

最近の知能検査等は、最新の教育心理学の研究を基に、適切な指導目標を設定したり、支援の方法を考えることを目的にしているものが多く、学ぶ価値は十分にあります。

行動観察からだけでは、わからない本人の全般的な発達の水準や特性、得意な領域を見るためにも、心理検査を実施し、活用することは大切です（【資料1】検査の種類）。

#### （２）どのように活用するか

検査の結果によって、その子どもの認知や運動の特徴や発達年齢などがわかります。指導に生かすためのポイントは、強い力（得意なところ）を把握し、課題や手だての中に取り入れることです。また、弱い力（苦手なところ）については、それを補うための手だてや対策をとります。また、検査の結果をもとに、保護者や本人に、その子どもの得意なところや不得意なところと不得意なところへの対応のアドバイスをすることで、障害の理解と自己理解を図ることができます（【資料2】、【資料3】を参照）。

### 4 子どもを見る力（行動観察の力）を養う

～ 分析的にとらえる視点が必要 ～

#### 1. まず、生徒の様子を観察しましょう

- （例）× 教示中に、きよるきよるしていたので、練習を始める前に、もう一度教えなおした。
- 教示中に、きよるきよるしていたが、様子を見てから次の対応を考えることにした。
- すぐに指示を重ねず、まず指示への対応の様子を見ます。

#### 2. 生徒の様子を教員の思い込みで捉えないようにしましょう

- （例）× 教示者の話を熱心に聞いていた。
- 教示者が話をしているときには、教示者に視線が向き、頷くことがあった。
- 記録をする際には、事実と事実から読み取れたことを区別できるようにしておくことが必要です。

#### 3. 生徒の様子と同時に、周囲の状況も注意して観察しましょう

- （例）× 窓の外に視線が向いた。
- 車が通りすぎると、外に視線が向いた。
- どういう状況の時、どういう様子が見られたか把握しておく、その理由につながるヒントが見つかることがあります。

#### 4. どうすれば課題に取り組めるか考えましょう

- （例）× 生徒がボールペンを分解しないで座っていたが、観察なので、何も働きかけずに見ていた。
- 生徒がボールペンを分解しないで座っていたが、まずは様子を観察し、どうすれば取り組めるか、次の働きかけを考えた。
- 全ての行動には意味があると捉え、行動の背景にある理由を考えて、どのような指導や支援が必要か考えることが大切です。

【図1】行動を分析的にとらえるポイント

前任の担当者から引き継いだ実態把握表や心理検査等の結果は、参考にすべき貴重な資料ですが、これだけでは実際の指導を行うことはできません。

今の子どもの実態や状態をつかむためには、目の前の子どもを見る必要があります。ただ漫然と眺めるのではなく、明確な意図（目的）をもって見るのが大切です（【図2】）。行動観察とは、子どもが自由に行動している様子を見るだけでなく、ある課題を遂行している様子を見たり、こちらから、意図的な関わり（質問等）をし、その対応を見たりするということも含まれます。

子どものどこを重点的に見るのかは、その時の必要性によって変わってきますが、ポイントは、指導につながる見方をするということです。つまり、「何がどのようにできるのか」ということと、問題があるときはどうすればそれが解決できそうか」というように、行動の意味を考えたり、分析的にとらえることが大切なのです（【図1】）。

- ・生活年齢の発達段階とのギャップ
- ・視覚、聴覚の使い方
- ・運動面の様子（粗大運動と微細運動など）
- ・物や人のかかわり（集中度、ごっこ遊び、ルール遊びなど）
- ・情緒の安定度（怒り、不満、パニック等からの回復の様相など）
- ・日常生活習慣（服装、排泄のサイン、食事や入浴、片付けなど）
- ・コミュニケーション（発話と言語理解、身振りサインの使い方など）

【図2】全体像をとらえるためのポイント

【資料1】

＜主な心理・発達検査の種類と特徴の紹介＞

(1) 全般的な知能の特性を測る検査

検査名	目的	適用年齢	特徴
田中ビネー 知能検査V	幼児～成人の知的水準や発達状態を明らかにする	2歳～成人 所要時間 30～60分	・多角的、総合的に一般知能を判定 ・教育相談、障害児教育、進路相談など様々な分野で幅広く活用されている
WISC-III 知能検査	児童生徒の知能を個別に精密に診断し、知能構造を明らかにする	5歳～16歳11ヶ月 所有時間 約60分	・言語性IQ、動作性IQ、全IQの3種類のIQ、4つの群指数と下位検査プロフィールなどの詳細な診断ができる
WPPSI 知能診断検査	主に幼児用として用いる	3歳10ヶ月～7歳11ヶ月 約45分	・知能の状態を「個人内差」という観点から分析的に診断できる
WAIS-III 成人知能検査	主に成人用として用いる	16歳～74歳 所要時間 60～90分	・幼児用の「WPPSI」、成人用の「WAIS-III (2006.6)」がある * WISC-IV 2010年頃発売予定 * WPPSI-III 2009年頃発売予定
K-ABC心理・ 教育アセスメント バッテリー	知能の特性を継時処理、同時処理のモデルから明らかにする	2歳～12歳11ヶ月 所要時間 30～60分	・知能と習得度を分けて測定する ・子どもの得意な認知処理スタイルを発見し、検査結果を指導に結びつける * K-ABC II 2009年頃発売予定

(2) 行動・社会性に関する検査

検査名	目的	適用年齢	特徴
新版S-M社会 生活能力検査	社会生活に必要な基本的な生活能力の発達を明らかにする	乳幼児～中学生 所要時間 約20分	・子どもの日常生活の様子から○×を記入するだけで、簡単に社会生活年齢を算出することができる ・「身辺自立」「移動」「作業」「意思交換」「集団参加」「自己統制」の6領域からの発達を知ることができる
精研式 CLAC-II (一般用)	自閉児の発達の障害が、現在のどの側面について、どの程度であるかを明らかにし、その診断と指導に役立つ	2歳～12歳 所要時間 40～50分	・行動特徴を大づかみに把握し、治療方針を明らかにする ・実施してきた療育の効果判定、自閉性障害の改善度を示す ・評定者は、前半は保護者、後半は先生に分けて実施

(3) 発達に関する調査

検査名	目的	適用年齢	特徴
新版K式発達 検査	精神発達の様々な側面にわたって、全般的な進みや遅れなどを調べ、療育に役立つ	0歳～成人 所要時間 約40分	・乳幼児期から全ての年代の子どもに適用でき、精神機能等を多くの側面にわたってとらえることができる ・検査用具が子どもにとって遊びに感じられ、自発的で自然な行動が観察しやすい
新訂版 自閉児・ 発達障害児教育 診断検査 (PEP-R)	自閉児及びコミュニケーション障害をもつ発達障害児にどのような教育指針を立てたらよいかを明らかにする	6ヶ月～7歳程度 所要時間 年齢によって異なるが、遊びながら実施するので45分～1時間30分	・ほとんどの項目が言語なしで実施できる ・実施方法が柔軟で、時間制限がない ・重度の障害児にも興味を持てる検査用具 ・TEACCHプログラムの中で開発された評価法 ・個別の指導計画の作成に活用される * PEP-III：2007年8月発売

(4) 言語発達に関する検査

検査名	目的	適用年齢	特徴
ITPA言語学 習能力診断検査 (93年改訂版)	情報処理に関する知的能力を分析的に明らかにする。認知発達に遅れや偏りを持つLD児などの認知構造理解に有用	CAまたはMAが3歳以上10歳未満 所用時間 約60分	・一般的な知能活動のうち、コミュニケーション過程に必要な心理的機能を測ろうとしている ・言語学習能力に関わる「個人内差」を明らかにする
絵画語彙発達 検査(PVT)	言語能力の発達を語彙という側面から明らかにする	3歳～10歳11ヶ月 所有時間 約15分	・言語表出を必要としないので、幼児や発達遅滞児にも使える ・知能検査と合わせ、バッテリーとして用いると有効である * PVT-R：2008年4月発売予定

(5) その他の検査

検査名	目的	適用年齢	特徴
フロスティック 視知覚発達検査 (DTVP)	視知覚能力の発達が不十分な児童への治療教育に役立たせる	4歳～7歳	・「視覚と運動の協応」「図形と素地」「形の恒常性」「空間における位置」「空間関係」の5領域において知覚技能を測定
ベンダーゲシュ タルトテスト (BGT)	視覚・運動形態の正確さを見る	5歳～成人 所有時間 10～20分	・作業法による人格テストの一つ ・脳の成熟度、微細脳損傷、情緒状態、精神障害の種類と状態を見る場合にも用いられる
グッドイナフ人物 画知能検査 (DAM)	人物画の分析によって、知的発達水準を測定する	MA 3歳～9歳 所要時間 約10分	・人物像の抽出が可能であれば検査可能である ・幼児、小学校低学年児、知的障害児を対象として動作性の知的発達水準を測定する
LD判断のため の調査票 (LDI)	LD(学習障害)のある子どもが示すことが多い特徴を見ることによってLDの可能性の有無を調べる検査	主に小学生 中学生については小6の尺度を準用 所要時間 約40分	・主要な6つの基礎学力(聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する)と行動、社会性の計8つの領域から構成されている ・心理、教育、医学等の領域の専門家が教育的判断をする際の一つの資料として用いる